

416) 妹よ

北風が ^{たそがれ} 黄昏を	突き抜けて俺を刺す
この町は時代から	捨てられた ^{いなか} 田舎町
街道の両側に	古ぼけた家が建ち
川沿いの砂利道に	おんぼろの蔵がある
この町に生まれたら	それだけで不幸だが
もの心ついたとき	この町に俺は居た
中学を卒業し	まっ先に町を出た
この時期を逃したら	この町で一生だ
凍りつく全身が	緊張で引き締まる
俺はふと考えた	この町で良かったと
ぬるま湯につかったら	いつまでも出られない
なんとなく年をとり	後悔で死んで行く
妹はこの町を	出られずに亡くなった
妹の通夜のため	俺は今日ここに来た
来年は東京で	働くと言ってたが
その夢を果たせずに	17歳で世を去った
妹よ安らかに	ふるさとの地に眠れ
妹よ永遠の	ふるさとの土になれ
北風が ^{たそがれ} 黄昏を	突き抜けて俺を刺す
妹の ^{なきがら} 亡骸が	俺のこと責めるよに